

ポスター

[PB1～PB19] ポスター

2018年6月23日(土) 15:00 ～ 16:00 ポスター会場 (3階・中会議室302)

[PB6] 日本人大学生のインターネットを利用した肺がんに関する情報収集行動

小林 伶（東京大学大学院 学際情報学府）

日本人大学生のインターネットを利用した 肺がんに関する情報収集行動

小林 伶^{*1}, 石崎 雅人^{*2}

^{*1} 東京大学大学院学際情報学府, ^{*2} 東京大学大学院情報学環

Information seeking behavior of the university students for the lung cancer on the Internet

Rei Kobayashi^{*1}, Masato Ishizaki^{*2}

^{*1} Graduate School of Interdisciplinary Information Studies,
The University of Tokyo

^{*2} Interfaculty Initiative in Information Studies, The University of Tokyo

抄録: インターネット上の医療情報の質の問題を解決するのは容易ではない。本研究では、インターネットを利用した医療情報検索の改善の手掛かりを得るため、日本人大学生(医療系学部を除く)15名を対象に、インターネットを利用して肺がん(組織型分類, 病期を指定)に関する情報(治療方法を含む)を実際に検索してもらい、その検索行動を分析した。参加者は、指示文からキーワードを選択して公的機関など信頼できるサイトを複数閲覧していた。検索において入力キーワードは重要であり、医療者によるキーワード提示が検索の手助けとなる可能性がある。しかし、情報の新しさや根拠まで注意を払った検索が行われておらず、関連学会などによる推奨サイトのリスト化が求められる。

キーワード インターネット 医療情報 肺がん 大学生 検索

1. はじめに

インターネットによる情報検索では、非常に多くの情報が簡単に得られる。しかし、情報間の整合性に関する検証が十分でないことにより、混乱や懸念が生じる可能性があり[1]、医療者は、このような質に関する問題点を認識している。

インターネット上の医療情報の質に関する問題を解決するのは容易ではない。現在、利用についての注意を喚起する活動が行われている(インターネット医療協議会)が、実際の利用者の行動を調査した結果に基づいたものではない。

本研究では、健康や医療に関する実際の検索行動に着目した先行研究[2]の枠組みのもと、日本人大学生を対象とし、インターネットを利用した医療情報の検索の実際を調査し、それをもとにインターネット上の医療情報検索の改善点を探る。

2. 方法

調査会社を通して、大学生(医療系学部を除く)の参加者を募集した。人数は、従来の研究[2]をもとに、最終的に15名とした。近年の喫煙に関する議論の広がりを考慮して、参加者には、肺がんの組織型分類(非小細胞肺がん)、病期(T2a, N1, ステージII B)、治療の可能性について、医

療知識がない人にわかりやすく説明するため、インターネット(Google Chrome)での検索(最大20分)を依頼した。検索の様子は、Apowersoft PC画面録画ソフト(v2.2.4)を利用して録画し、それをもとに閲覧したサイトの情報を得た。検索終了後、調査で行った情報収集に関してインタビュー調査を実施した。

3. 結果

参加者15名の年齢は20.6(S.D.1.1)歳、性別は男性8名、女性7名であった。15名全員がパソコンを所有しており、日常的にインターネット機能を利用していた。

15名が検索に利用したキーワード数は、1つから5つとなった(Table1)。検索結果一覧から閲覧したサイトの表示順位は、Table2である。個人としては、4位までが2名、5位までが4名、6位までが3名、7位までが3名、9位までが3名であった。

15名が閲覧したサイトは、合計30となった。国立がん研究センター等の非営利組織または公的機関5、大学附属病院等の医療機関8、製薬企業4、健康関連の株式会社等の特定の治療に関する商業的なもの8、個人医師1、ウェキペディア・コトバンクの事典3、その他1となった。これら

のうち、情報提供者が明確なサイトは 28 であった。15 名全員が閲覧したサイトは、肺がんの基礎知識、診断、病気、治療など、一般向けに解説している製薬企業のサイトであった。2 番目に閲覧されたのは大学附属病院のサイト(10 名閲覧)で、3 番目は国立がん研究センターがん情報サービスのサイト(9 名閲覧)であった。

検索では、情報の新しさ、出典などの情報の根拠を探すわけではなかった。また、情報の提供者に関する情報がわかりにくい場合でも、調べていなかった。

Table.1 キーワードと検索回数

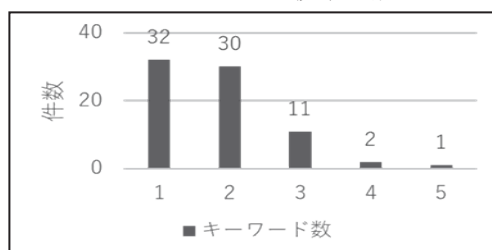
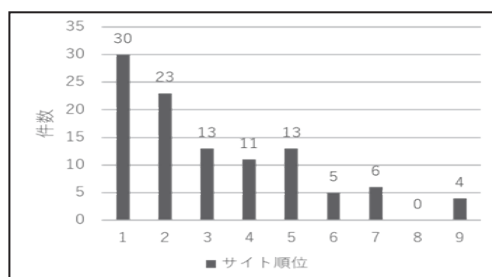


Table.2 閲覧したサイトの順位



4. 考察

本調査では、参加者に提示したいくつかのキーワードを使って検索し、検索結果の 1 ページ目に出てくるサイトを複数閲覧していた。サイトは、製薬企業、医療機関、公的機関が中心であった。検索行動だけからは、日本インターネット協議会の利用の手引きに沿った行動であると判断できる。インターネット上の情報検索において入力キーワードは重要であり、医療者が患者に対して検索キーワードを示すことにより、患者が検索する際の手助けになる可能性がある。

本調査で閲覧された 30 のサイトでは、2 つを除いて情報提供者の情報が得られたが、検索の際にはその情報を検索しているわけではなかった。製薬企業が提供するサイトであっても、企業名は

目立たないようになっているなど、公的機関や医療機関のサイトを除き、情報提供者に関する情報はわかりにくくなっていた。

検索後に行ったインタビューによると、医療機関や公的機関のサイトは信頼できると回答していたが、検索では、それ以外の情報も閲覧していた。また、検索結果上位に表示される情報については、新しい情報である、多く閲覧されている情報である、というように捉えられており、検索では検索結果上位の情報を選択していた。

科学的な根拠や情報の新しさについて、検索では調べることはなかった。こうした情報は、サイト全体をよく見る必要があり、簡単に得られるわけではなかった。そのため、限られた時間での検索では、そうした情報まで確認することは難しいと考えられる。医療情報に関するすべてのサイトをチェックして改善すること、信頼できるサイトを検索上位に表示させるようにすることは困難であるが、例えば学会単位で信頼できるサイトのリストを作成し、公表するといったことができれば問題を軽減できる可能性がある。

5. 結語

本研究では、日本人大学生 15 名による実際に医療情報行動をもとに考察を行い、医療者による検索キーワードの提示、関連学会による推奨サイトのリスト化の提案を行った。今後は、検索者が正しく情報を理解できているかまで分析を行い、さらに議論を深めていきたい。

参考文献

- [1] Jadad AR, Haynes RB, Browman GP, The Internet and evidence-based decision-making: a needed synergy for efficient knowledge management in health care, CMAJ, 162,3,362-5, 2000.
- [2] Eysenbach G, Köhler C: How do consumers search for and appraise health information on the world wide web? Qualitative study using focus groups, usability tests, and in-depth interviews, BMJ, 324, 573-6, 2002.